

アドルノと他者経験論 ——現象学研究をつうじた他者概念の理解*——

青柳 雅文

はじめに

本稿では、現象学の主要問題である他者経験論にたいする Th・W・アドルノの視座から、他者および他なる自我の問題を考察する。そして彼の現象学研究から、〈非同一的なもの〉の思想を浮き彫りにする。

アドルノは、生涯に渡り E・フッサールの現象学を研究していた。彼のフッサール理解は、二面性を持つことが特徴的である。つまり彼は一方でフッサールの主張を肯定的に評価し、他方でその主張の不徹底さを批判する。アドルノの理解はこの二面性を持つ点に注意が必要であろう。こうした彼の研究の集大成は、『認識論のメタ批判 フッサールと現象学的アンチノミーにかんする諸研究』（1956年、以下『認識論のメタ批判』と略記）として公刊されている。だがこのような彼の現象学研究において、他者経験論を主題としたものとなると非常に限られる¹。本稿ではアドルノのイギリス滞在期間に書かれた論文「フッサール哲学について」（1937年）²から、その最後にある「他なる（他者の・異他的）自我 *fremdes Ich*」と表題の付された節を用いる。この節は、フッサールの『デカルト的省察』³および『形式論理学と超越論的論理学』を主に引き合いに出しながら、アドルノが他者経験論を主題とした数少ない箇所である。以下では、この論文の最終節の叙述をたどりながら、彼における他者の問題を考察する⁴。

ところでアドルノは、〈非同一的なもの〉の思想を主張したことで知られる。本稿では、彼における他者概念と〈非同一的なもの〉との関連性についても考察する。〈非同一的なもの

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費 JP17K20193 による研究成果の一部である。

¹ アドルノのフッサール評価には、たとえば古賀徹、1994、「アドルノと現象学 『認識論のメタクリティーク』を中心に」（『哲学』44号、254-263頁）、細見和之、1994、「アドルノのフッサール論を表象すること」（『独仏文学』28号、101-114頁）などがあるが、いずれも『認識論のメタ批判』を題材とするに留まる。また Peter E. Gordon, 2016, *Adorno and Existence*. Cambridge, Harvard University Press; Richard Klein, Johann Kreuzer und Stefan Müller-Doohm (Hrsg), 2011, *Adorno-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart, J.B. Metzler Verlag. などでは、現象学研究の形成過程を射程に入れているが、本稿で扱う他者経験論との結びつきには言及されていない。

² この論文の執筆経緯については、拙論、2011、「内在的批判への道程 ——アドルノのイギリス滞在期間におけるフッサール研究」（『現象学研究』第27号、97-104頁）参照。

³ ただし、アドルノは論文執筆当時、『デカルト的省察』のフランス語版（Husserl, 1931, *Méditations Cartésiennes. Introduction à la Phénoménologie*. Paris, Librairie philosophique J. Vrin.）を参照した。本稿で言及する際には、ドイツ語全集版から引くこととする。

⁴ アドルノが扱うフッサールの著作や他者経験論はきわめて限定的であり、こんにちまでの研究動向を鑑みると、アドルノのフッサール論を取り上げる意義に疑問が生じるのは当然であろう。だが本稿で目的とするのは、フッサールの現象学や他者経験論への解釈ではなく、こうしたフッサールの主張と向き合ったアドルノの思想を解明することにある。彼の思想の全体像を、彼の現象学研究を道筋として明らかにすることが、最終的に目指されるのである。

の) は、たんなる区別や外面的な差異を示すのでない。それは同一性とともにより内在的に理解されつつ、何らかの他者性・超越性を保持する。たとえば後年彼は「概念の解明をつうじて [……]、概念の他者である〈非同一的なもの〉が概念の内包する意味であることが、概念自体において、概念の外延を傷つけることなく明らかになる」(GS5. 363) と述べている。また彼は「たしかに〈非同一的なもの〉、認識されないものが、認識をつうじて同一的になり、非概念的なものが概念把握をつうじて〈非同一的なもの〉の概念になる [……] それにもかかわらず〈非同一的なもの〉自体はやはりたんなる概念にはならず、概念から区別される〈非同一的なもの〉の内実が残る」(GS5. 375) とも述べている。本稿では、アドルノが他者概念を、こうした〈非同一的なもの〉と同様の性格を持つものとして用いていること、他者概念が〈非同一的なもの〉の表現のひとつであることをあわせて示したい。

1. 他者経験にたいするアドルノの理解

本章では、アドルノが他者経験の中にどのような問題を見ているか、彼がフッサールの他者経験論をどのような主張として理解しているかを確認する。その上で、これらの指摘にたいするアドルノの観点を考察する。

(1) 他者経験における困難

そもそもフッサールが他者経験論を示したのは、独我論という非難に応答するためであった (vgl., Hua I. 91)。アドルノによれば、この応答に際して「彼 [=フッサール] には、形相的な我 ego から事実への跳躍、超越論的主観性から「原初的世界」への跳躍は可能だと思われる一方で——彼にとっては、まさに自己自身の形相的な私の事実的内実が隠れているから可能なのである——、他我 alter ego は、いつも重大な困難をもたらすとされる」(GS20. 113)。ではこの困難とは何か。アドルノはフッサールの主張を次のように理解する。

一般に経験において、他者は生身で、つまり「肉と骨をともなって」現在していると言われる。しかしながら、自分固有のものをすべてともなった他者が、〈起点となる意識 Ausgangsbewußtsein〉に「直接的に与えられて」いると主張することは、やはりできないであろう。さもないと他者は、〈起点となる意識〉についての体験であって、その意識と同一だということになるであろう。(Ebd.)⁵

その一方でアドルノは、次のようにも述べている。

フッサールは、所与性概念のことを見抜いており、またそれと同じようにして、間主観性が所与性において解釈し直されるので、間主観性が救済されえないという

⁵ フッサール自身も同様のことを述べている (vgl., Hua I. 111)。

ことを鋭く見ている。しかし彼は、この解釈のし直しが内在哲学にとって避けられず生じるものだということを見ていない。また彼は、内在哲学には、彼自らが詳述した理論そのものによって作り出されたあの原的経験に訴えかける以外には何も残されていないことを見ていない。(Ebd.)

したがって、他者経験における困難とは、他者が直接的所与でないが、それを現象学の場合には意識において直接的で内在的にとらえるしかないという事態である。そしてアドルノは、こうした困難にたいしてフッサール自身には見落としがあると指摘するのである。

(2) 「脱出の試み」としての他者経験論

ところでアドルノは、現象学を「脱出の試み」として位置づける。この「脱出の試み」とは、「観念論からの脱出の試み」(GS20. 57)とも呼ばれ、「意識内在の観念論的分析が提供するのと同じカテゴリーによって、意識内在から、つまり構成的主観性の領域から脱出」(GS20. 52)し、「障壁」(ebd.)である「意識内在を打破する努力」(ebd.)を意味する。アドルノは論文において、この「脱出の試み」のひとつとして、他者経験論を理解するのである。彼はそれを次のように述べている。

〈起点となる自我 *Ausgangssich*〉は、「経験的」自我として、その「実在性」の点からすれば、あらゆる他の経験的自我と同じ階層にあるのであって、他の経験的自我よりも存在論的優位を持たない。まさにそれゆえに、フッサール自身でさえも、その〈起点となる人格 *Ausgangsperson*〉を我 *ego* へと還元しようと——無駄に——試みざるをえない。批判〔的な探究をおこなうこと〕によって明らかになったのは、「純粋な」自我が絶対的に単独な「私の」自我の中に含まれないということ、さもなくばその「純粋な」自我がつねにこの「私の」自我のままになるからだということである。しかしその一方で人間という「本質」は——自我論的内在 *egologische Immanenz* から生じないとすれば——、多くの人間から抽出したものであって、フッサールの場合、まさに形相的におこなわれてはじめて基礎づけられるとされる。こうしておこなわれることは、内在的立場を守りながらおこなう現象学の最後の脱出の試みである。(GS20. 113-114)

アドルノによれば、〈起点となる自我〉は純粋な自我ではなく、他なる自我と同様に経験にもとづいており、他なる自我にたいして何らの優位もない。その意味で他者経験論は、〈起点となる自我〉を中心とする立場を退ける。そしてこのことを意識の経験において遂行する。つまり〈起点となる自我〉の意識に内在しながら、その意識だけで完結する純粋性を回避しようとするのである。その一方で、人間の本質は多くの人間から導き出されるのだとされた。ここで人間とは、実在する個別的な存在を指す。そこには〈起点となる自我〉を持つ人間だ

けでなく、他なる自我を持つ人間も含まれる。とはいえ人間の本質は、あくまで意識内在において形相的に抽出される。したがってアドルノにとって他者経験論は、内在的でありながら、その枠組みを「脱出」し、実在する人間の自我についての経験を問う立場として理解されるのである。

(3) 他者経験論にたいするアドルノの観点

アドルノは以上のように他者経験論を理解するが、そこからは彼自身の観点が明らかになる。まずアドルノは、形相的（形式的あるいは本質的）なものとの事實的（内容的あるいは実在的）なものを対比させながら、フッサールの主張を理解する。そしてそこには、純粋なものと経験的なものとの対比も含まれる。こうした対比は、一見すると素朴に思えるかもしれない。だがアドルノにおいては、純粋とされるものが経験的にとらえられ、実在的な内容を持つものが形相的にとらえられるように、対比されるものがたがいに浸透するように関係しあっており、それらが峻別されたりそれぞれが単独的であったりするのではない。アドルノにとって他者経験論だけでなく、〈起点となる自我〉や他なる自我も、その関係において存立するのである。しかも彼は、こうした観点によってフッサールの主張を一概に拒否しない。むしろアドルノは、同様の観点をフッサールの主張の中に見るのである。

ところで、このアドルノの観点は、フッサールの主張にたいする正確な理解だとは言い難いであろう⁶。そもそもフッサールは現象学を超越論的観念論と規定し、その立場を保持する（vgl., Hua I. 85ff.）。それゆえ彼は従来の伝統的な観念論を批判するとしても、アドルノが言う「脱出」の意図を持っていない。またこれとともに、フッサールは他者や他なる自我についても、この超越論的観念論の枠組みの中で理解しており、やはりアドルノの場合とは異なる。したがってアドルノとフッサールでは、他者経験論にたいする立脚点が違っており、当然その理解や意図も異なるのである。とはいえ、前述のアドルノの観点をつうじて、問うべき課題が生じてくる。

第一に、他者経験論はどのような点で「脱出の試み」となりうるか、という課題である。アドルノは他者を現存する生身のものとして位置づける。また彼は、〈起点となる意識〉を、その他者と対峙する経験主体の意識として理解する。ここで主体として登場するものも、その他者も、アドルノの場合にはあくまで経験において理解される。換言すれば、それらを純粋に理解する見解を暗に退けているとも読めるであろう。それゆえこの観点から他者経験論を見た場合、フッサールの主張がアドルノと同じ帰結にはならないであろう。そしてアドルノからすれば、「脱出の試み」は失敗に終わるとされる。そこでアドルノは、他者経験論がどのようにして可能になるのか、その経験の成立する場面に着目するのである。

第二に、他者経験論は「脱出の試み」として、内在的な立場、「内在哲学」にたいしてどのような問題を投げかけているか、という課題である。アドルノは前述の引用において「内

⁶ アドルノ自身、フッサールの特定の著作を忠実に解釈するよりも、「文献学的あるいは解釈上の要求を掲げない」（GS5.9）立場である。

在哲学」という言葉を用いた。彼においてそれは、対象を意識内在で説明するのに徹する主張を指す。彼がこの主張として念頭におくのは、伝統的な観念論、そしてE・マッハやR・アヴェナリウスに代表される経験批判論である⁷。さらにフッサールの現象学についてアドルノは、観念論から脱出する立場であるとしても、やはり観念論の一形態として理解しており、それゆえ内在哲学に含んでいる。アドルノの理解からは、内在哲学である限りでの現象学が、他者概念やその経験を十分に説明できるのか、という疑問が見出されるのである。その一方で彼は、それでも現象学を内在哲学に留まるものでないとみなす。こうしたアドルノの二面的な理解が、他者および他なる自我を問う手がかりとなる。以上ふたつの課題について考察を進めたい。

2. 他者経験とその基盤

アドルノは、フッサール自身の意図とは異なるにせよ、他者経験論でおこなわれた「脱出の試み」が成功しているとみなさない。本章では、フッサールの主張にたいするアドルノの批判的な解釈を引き合いに出しながら、他者経験の成立する場面を考察する。

(1) 「私」と「われわれ」

まずはフッサールの主張である。彼は「各自の主観性から始める必然性」(Hua XVII. 243)を掲げて、次のように述べている。

世界は恒常的にわれわれにとってそこに *für uns da* あるが、しかしやはり何よりもまず、私にとってそこに *für mich da* ある。その場合このことも私にとってそこにあるのであって、それゆえ次のことが私にとって意味を持つ。つまり、世界がわれわれにとってそこにあるということ、しかもひとつにして同じ世界として、かつまたこれこれしかじかと要請される意味を——たとえば悟性の関心と心情の関心を宥和させるのに適応して「解釈されるべき」意味を——持つ世界としてではなく、何よりも最初の根源性の中で経験そのものによって開示されるべき意味を持つ世界としてそこにあるということである。(Hua XVII. 249)

この主張にたいして、アドルノは「世界が「われわれに」とってひとつにして同じ世界としてそこにある、という主張は内容から見ても非常に疑わしいし、この虚構の「われわれにとってそこに」を「私にとってそこに」の中に基礎づけようとする方法もまた非常に疑わしい」(GS20. 114)と批判する。そして他者経験をつうじた「脱出の試み」は、「[……] たんなる思念作用が認識の正当性の源泉にされ、そしてさらに志向の欺瞞的優位が効力を発する」

⁷ この内在哲学には、アドルノの大学時代の指導教員であったH・コルネリウスも含まれる。アドルノは彼の指導のもと、現象学に関する学位論文を提出した。

(ebd.) がゆえに、つまり「私」の根源性に帰結するがゆえに、結局失敗に終わるとされる。

ここでアドルノは、「私」との対比から、「われわれ」という表現に注目する。彼において「われわれ」とは、世界の経験に関わるが、「虚構」と表現されるように、内容的に空虚な概念であることを意味するのと同時に、「われわれにとってそこに」と表現されるように、複数の自我あるいは人間の存立するところも意味する。この限りでは、「われわれ」は他者経験の主体や関係を含む言葉である。そして「われわれ」は、他者経験論の場合と同様に、「私」と他者の存立する経験的關係であるのと同時に、実在する多くの人間を指す言葉でもある。その場合「われわれ」は、一方で「私」や他者を内容面で支えるものであり、他方で多くの人間から形相的に抽出したのものである。それゆえ「われわれ」は、「私」単独の意味内容によって説明されるのではない。しかしフッサールの場合には、「われわれ」は結局「私」の思念や志向へと基礎づけられる。そしてこれによって「われわれ」だけでなく他なる自我もまた、「私」の思念や志向へと基礎づけられる⁸。これにたいしてアドルノは、「他なる自我は〔「私」の意識において〕「与えられて」いるのではなく、〔「われわれ」の〕「経験」において証示されるべきであり、その一方で自我の道具へと格上げされた志向は、たとえば人が特定の人間に出会ったという思念が心理学的に失望されうるのと同じようにして、そもそも失望にさらされるようなものである」(ebd.) と批判するのである。

ところでアドルノは、フッサールにおける「われわれ」と「私」との関係に別の面を見ている。つまり他者経験は、フッサールは意図していないとしても、「われわれにとって」という意味を含んでおり、「逆に〈私にとって〉が〈われわれにとって〉へと還元され、現象学的に最終的な事態として後者に基礎をおいている」(GS20. 115) ののである。このように、彼にとって「われわれ」は二義性を持つ。フッサールはそれを「私」へと基礎づける方向で最終的に統一しようとした。これにたいしてアドルノは、「われわれ」の二義性を保持しつつ、「諸モナドのもとでは、いずれも他者にたいする絶対的優位を持たない」(ebd.) と述べて、フッサールとは逆に「われわれ」へと基礎づけようとするのである。

(2) 社会と生活世界

アドルノは、「われわれ」に二義性を見出したが、さらにフッサールの主張に意図せず含まれる事態を見出している。それは「フッサールが、土台となる社会的現実近づいて」(GS20. 115) おり、「モナドにたいする社会 *Gesellschaft* の優位性の意識が、現象学的エポケーの壘壁を乱暴に叩く」(ebd.) という事態である。そしてこの事態において、「[……] まさにフッサールは、エポケーを見捨てないがゆえにきわめて弱々しい補助具を必要とする、つまり現実が与件の中に入ってこないがゆえに社会に固有の「与件」に依拠できない直観主義的方法を必要とする」(ebd.)。ここでアドルノは、社会という表現によってその事態を説明する。フッサール自身も『デカルト的省察』において社会(性) *Sozialität* という言葉を用

⁸ アドルノは別の箇所で「絶対的他人」は、エポケーの命令のもとで、対象化されるそれ自身の根源から徹底的に疎外された、主観の能作以外の何ものでもない」(GS5. 167) と述べている。

いるが、ふたりの用法はまったく異なる。フッサールの場合、社会は「共同性」や「文化世界」と同義的に用いられ、あくまで与件として解明されるべきものとして理解される (vgl., Hua I. 120ff.)。これにたいしてアドルノの場合、社会は「現実」と結びついており、引用にあるように意識内在の「与件に入っていない」ものであり、いわば別種の「与件」としてある。このことから、少なくとも（用いる原語自体が異なることからしても）ふたりの用法に直接的な影響関係は認められない。ただし、アドルノの論文において社会の持つ意味は示唆的であるため、ここでは同時期の討議録から補足したい。彼は内在哲学への批判とともに次のように述べている。

感性的な所与性の概念を、たとえば現象に結びついた解明方法と関連づけて定義しなければならず、それが進行する中で当該の事実は現実的なものとして際立たせられます。[……] 進歩的な [=伝統的でない] 観念論において、感覚主義に反対する十分な契機となるのは、たんなる所与性のもとに留まるものでなく、合法則性の形式の中で、それを超え出るものです。所与性は、それが入ってゆく基礎づけ連関をつうじて証明されます。この基礎づけ連関は、主観的に定義されてはならず、そこに社会が含まれるべきです。(HGS12. 369-370)

社会的現実、一方で所与に含まれるが、他方でそれを超え出るという意味を持つ。したがって社会とは、諸モナドとしての自我を支える土台となった内在的なものであるのと同時に、現象学的に還元されるのでない超越的なものなのである。

このように、アドルノがフッサールの他者経験論に見出した社会は、前述の「われわれ」における、「私」の基礎になるという意味を担う。そしてこのことは、「われわれ」と「私」との対比をつうじて顕在化する。それゆえこの基礎としての社会は、最初から素朴に想定されるのではなく、意識の体験を内在的に分析する現象学のプログラムによってはじめて露呈するのである。だがこれと同時に、こうした基礎としての社会が露呈することで、「私」への基礎づけは阻まれうる。それゆえこのことは、現象学のプログラムの否定を意味しうる。つまり社会には現象学の自己崩壊の契機が含まれており、これがアドルノにおいては、「脱出」を可能にするものとして位置づけられるのである。アドルノが他者経験論の中にこうした契機を見出したことは、現象学の限界とあらたな可能性をともに示すのである。

ところで、アドルノにおける社会からは、フッサールの言う生活世界との類似性が思い起こされるかもしれない。フッサールが生活世界を論じるのは『ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学』においてだが、アドルノが論文執筆時点でそれを読んでいたとは考え難い⁹。また彼が読んでいた『デカルト的省察』においても生活世界の問題は登場するが、それをこ

⁹ アドルノが論文を構想し執筆したのは1934年から37年の間である。フッサールは『ヨーロッパ諸学問の危機と超越論的現象学』の原型となる講演を1935年にウィーンとプラハでそれぞれおこなった。両者の直接的な影響関係は見出されていない。

んにち知られている概念として理解していたとみなすのも難しいであろう¹⁰。しかしアドルノの言う社会は生活世界と同様の意味合いを含んでいる¹¹。その限りでアドルノは、社会という表現でもって生活世界の問題を、それが明確に主題化されていないフッサールの主張の中から見出したと考える。では仮に、フッサールの生活世界論を、アドルノの理解に即して展開すれば、「脱出の試み」としての他者経験は十分に説明可能であろうか。前述のように、社会という表現は、「われわれ」の二義性によって生じたものであった¹²。そしてフッサールにおいて「われわれ」は、結局のところ「私」へと基礎づけられる。アドルノの立場からすれば、生活世界論を展開したとしても、現象学が内在哲学のひとつである限りでは、「脱出の試み」も不徹底に留まるであろう¹³。

3. 超越としての他者の経験

アドルノは、フッサールの現象学の中に「脱出」の契機を見出しつつ、やはり内在哲学に留まるのではないかと考える。その場合、他者経験論はどこまで展開可能か、内在的な立場にどのような問いを投げかけられるか、という課題が生じる。本章では、引き続きアドルノの批判に沿いながら考察を進めたい。

(1) 「類比的な準現在化」をめぐる

前章で示したように、アドルノはフッサールの主張に、土台としての社会的現実を見出した。ところがアドルノによれば、フッサール自身はこの社会的現実へと接近せず、「直観主義的な方法」を必要とするとされた。アドルノはその方法を「類比的な準現在化」(GS20. 115)と呼んでいる。この方法にフッサールが見出した問題について、アドルノは次のように理解する。

[……] 直接的に与えられないものを媒介するという「準現在化」(「共現前」[……])は、原的知覚と、すなわち身体として類比される物体の知覚と結びつく。しかしその際、他者の「身体」、他の自我 *anderes Ich* は、原理的に超越的である。な

¹⁰ 『デカルト的省察』のドイツ語版において、「生活世界」はすべて *Lebenswelt* (あるいはその複数形)である。だがアドルノが用いたフランス語版の場合、*communauté de vie* や *monde de la vie humaine* など、複数の表現が用いられており、用語として固定されていない。

¹¹ フッサールは生活世界を「唯一の現実的世界、現実知覚によって与えられる世界、そのつど経験し経験される世界」(Hua VI. 49)と位置づけている。

¹² ここでは「われわれ」の二義性を取り上げたが、生活世界概念についても、たとえばU・クレスゲス、1978、「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」(新田義弘・小川侃(編)『現象学の根本問題』晃洋書房)での指摘がある。

¹³ ここで思い起こされるのが、現象学的社会学の立場である。とくにA・シュッツらの主張が知られる(vgl., Hilmar Brauner, 1978, *Die Phänomenologie Edmund Husserls und ihre Bedeutung für soziologische Theorien*. Meisenheim am Glan, Hain Verlag.)。ただし、現象学の方法の徹底化によって社会の問題を考えようとするアドルノとは差異が認められる。

ぜならば、それについての意識は、調和的な¹⁴自体所与性によって確認されることはできず、つねにひたすらあたらしい調和的な準現在化によってのみ確認されることができるからである。したがって、どのように「準現在化」がその存在の価値を生身の現在から与えられるのか、という仕方によってのみ、確認と実在化は構成されることができる。つまりこの「どのように」の規定がアポリアな理論の悩みの種である。(GS20. 116)

ここでアドルノが指摘する「悩みの種」とは、他なる自我が超越的であるがゆえに、間接的にしか確認することができないのにもかかわらず、その認識と存在を、直接的に与えられる現在においてどのように証明するのか、ということである。これはすでに取り上げた、他者経験にともなう困難と同様に、直接的に与えられない他者を内在的にとらえるのかという問題である。彼によれば、この問題にたいしてフッサールが示したとされるのが「振る舞い *Verhalten*」¹⁵である。アドルノはフッサールによる問題解決を次のようにまとめる。

他なる有機体は、有機体としての経験の進行の中で、その転変しつつもつねに調和的な「振る舞い」[……]をつうじてのみ確認される。振る舞いの物理的諸契機は、心理的諸契機を「見出し」として告げてくる。根源的経験と同様に、確認をつうじて進展する経験も、この振る舞いに依拠する。諸局面の首尾一貫した経過が生じないのならば、知覚された物体はたんなる仮象の「身体」として理解されることになるであろう。(Ebd.)

アドルノの理解によれば、有機体が振る舞う際には、何らかの「首尾一貫性」があり、それが心理的諸契機を「見出し」にしながらか示されてくる。フッサールにとっては、この首尾一貫性のあることが、有機体が自我を持つことの証明となる。だがアドルノからすれば、「示されたものの首尾一貫性は、思念されたものの現存在に関して何も含んでいない」(ebd.)のであり、それどころか「妄想の首尾一貫した体系があり、だからアプリアなものにたいして首尾一貫した欺瞞もありうる」(ebd.)のではないかと疑問視する。つまり彼にとっては、振る舞いの首尾一貫性が、他者が身体を持つ存在だということを意味するわけではない。しかもそのことが、自分固有の存在と同じように自我を持つ存在だということを意味するわけでもない。だがフッサールは、それを自分固有の意識へと引き戻すことで証明しようとする。アドルノはこれについて、「他なる自我についての意識は、特別な意識構造によって、

¹⁴ フッサールの場合、「調和的一致」という表現で使われることが多い。だがたとえばアドルノの同一性／非同一性という観点からすれば、そもそもこの調和がどのようにして可能なのか、議論の余地はある。

¹⁵ この概念を用いた B・ヴァルデンフェルスの論考があるが (vgl., Bernhard Waldenfels, 1977, „Verhaltensform und Verhaltenskontext,“ in *Phänomenologie und Marxismus*. Band 2, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. S. 134-157)、ここでアドルノが用いた意味とは異なる。アドルノは「振る舞い」を、行動主義的なものとして理解し、否定的な評価を与えた。

つまり想起のような固有な志向的変様によって基礎づけられるとされる」(ebd.)と述べている¹⁶。

その一方でフッサールの場合には、これとは矛盾するかのように、他なる自我を超越的なものだとみなす。その主張をアドルノは次のように理解する。

想起体験をする者にとって、過ぎ去ったものは、想起をつうじて現在的に与えられる。想起されたものの規定は、もっぱら想起の調和的な総合において遂行される。しかし過去が生き生きとした現在をその変様である限りで超越するのと同様に、準現在化された他なる自我は、「私に」属する固有存在を「原初的な仕方」で超越する。(GS20. 117)¹⁷

アドルノによれば、このフッサールの主張は、その内在的な立場と矛盾するだけでなく、「この類比は貫徹されていない」(ebd.)とされる。アドルノは、フッサールの他者経験論における準現在化と現在化との関係、想起と知覚との関係、そして他なる自我の知覚と物の知覚との関係、これらの関係を類比的だとみなす。それゆえフッサールにおいて他者経験は、準現在化や想起になぞらえて説明されていることになる。類比が「貫徹」されるとは、他なる自我の超越性を退け、自分固有のものの変様として位置づけることを意味する。(もちろんこの場合、最初に挙げた他者経験における困難へと問題が逆戻りすることになる。)この事態にたいしてアドルノは、「他なる「身体」の知覚と「物」の知覚との関係は、想起された苦痛と現在の苦痛との関係と類比的な特徴を示さない」(ebd.)という事例を示しながら、「そもそも「現象学者」にとって、この類比によっては、意識様式から「作用性格」は見出されないであろう」(ebd.)と述べている。ここで彼は「意識様式」という言葉を用いるが、それは現在化と準現在化のように、意識の志向とその変様によって直接的認識と間接的認識が生じることを指す。彼からすれば、間接的認識だとしても想起と他者経験は類比的なものとして導き出されない。想起と知覚の場合には、その対象に時間的差異があるのにたいして、他者経験と原初的な経験の場合には、その対象がそもそも異なる。そして前者の対象が自分固有の意識の相関者となるのにたいして、後者の対象、とりわけ他者は、まさに他なるものとしての超越性を保持する。それにもかかわらず、どちらも間接的認識であるがゆえに類比的だということになっている。これらの点からアドルノは、フッサールによる類比を疑問視するのである。

アドルノは、フッサールのおこなう類比によっては、その内在的立場を維持できないことを示す。むしろこの類比は、対象となる他者の超越性を露呈させるのである。さらには、超越的な対象、客観的な存在としての他者の問題が示唆されるのである。

¹⁶ これについてフッサール自身は次のように述べている。「「他なるもの」は、自分固有のものに類比的なものとしてのみ考えることができる。それは必然的に、その意味の構成のゆえに、最初に客観化された自我と私の原初的世界との「志向的変様」として現れる。」(Hua I. 118)

¹⁷ フッサール自身も同様のことを述べている (vgl., ebd.)。

(2) 意識と存在

前節では、フッサールが類比によって他者を十分説明できないことが示された。アドルノによれば、「この類比は、まったく妥当性格の中に位置づけられ、おそらく後期フッサールの「主観へと方向づけられた」分析は、それに満足することはないであろう」(GS20. 117)と指摘する。アドルノが念頭におくのは、フッサールが述べた「論理学の二面性」(vgl., Hua XVII. 36ff.)の内容であろう。つまり論理学は主観的な作用と客観的なものというふたつの面へと方向づけられるとされる。そして後者は「恒常的に妥当する意味を持ち、その上さらに、顕在的に認識する主観性とその諸作用を超え出るといふ、特殊な意味で客観的妥当性さえ持つ」(Hua XVII. 37)とされ、「反復の中で同一的なもののみであり、恒常的に存在するものとしてふたたび認識され[……]文化世界の他の対象性と同様に客観的に現存しており、こうして客観的に持続して、誰にとっても見出され、同じ意味で追理解され、間主観的に同一視され、誰も考えていなくても現存する」(Hua XVII. 37-38)とされる。アドルノからすれば、他者は自分固有の意識を超越したものであるが、フッサールの分析は二面的であるがゆえに、不十分なままである。アドルノは、内在哲学としての経験批判論と対比しながら次のように述べている。

[……] 妥当性格もさまざまである。たとえば経験批判論者は、想起志向の彼岸にある想起された体験の即自について語らないし、それを必要することもない。[……] しかしフッサールにとって他なる自我は、「振る舞い」によってもっぱら指し示されたその絶対的な固有存在を持つ。それはまったく別の基本的な意味において、すなわちすでに述べた想起の分析が残したその所与の連関とは異なって超越的である。(GS20. 117)

こうしてアドルノは、フッサールを内在哲学から区別する。前述のように、フッサールが論理学に二面性を見出したことは、他なる自我について、意識内在におさまらない超越性を示唆している。そしてその超越は何らかの固有の存在として自我にともなう。しかもこのことは他なる自我に限らず、「私」の自我の場合にも何らかの存在がともなうといふ。つまりフッサールの現象学において、自我には何らかの存在が超越的な対応関係にある、ということが想定されるのである。だが同時にその存在は、それ自体で存立し、説明されるのではない。むしろその存在は、意識へと還元されてはじめて説明され、その意識は存在を条件づけている。このことに関連して、アドルノは論文の最後を次のように締め括る。

存在にたいする絶対的で総体的な条件はない——これを主張することは、すでに思考の優位を妥当なものとして先取りすることを意味する。しかしこれによって、独我論にたいしてだけでも、正しい見方を与える絶対的な知識の規準は消失する

のである。「私についての」知識として個体的意識だけが、他の人間よりも直接的に現れる。しかし個体の現存在、つまりそのような知識の条件は、他の個体的現存在に先行して秩序づけられることはない。意識にたいする存在の支配的優位を洞察することで、「独我論の問題」は解決されるどころか、抹消されてなかったことになる。しかしこの問題に真なる内実として含まれるもの、つまり人間自身のモナド論的現存在——これが廃棄されることがありうるとすれば、いつの日かついに意識が存在を支配するときのことであろう。(GS20. 118)

アドルノはフッサールの他者経験論から、他者の他者性・超越性を見出しており、しかもこのことがフッサールの主張においてすでに想定されていると考える。そしてアドルノは、この他者の存在を素朴に実在するもの、意識から独立したもの、意識にたいして最初から優位にあるものだとはみなさない。むしろ彼にとって他者とは、存在にたいする意識の優位が貫徹されてはじめて、そのような意識内在と関係しあう超越として、意識の優位性を上回るものとして現れてくるのである。

以上のようなアドルノの理解は、フッサールの主張を全否定するものではない。むしろその主張の意義を一方で認めつつ、他方でその主張の不徹底を批判するものである。またアドルノが示した意識と他者の存在との関係は、彼の〈非同一的なもの〉の思想の特徴を端的に表現する。すなわち他者の超越性は、意識内在において理解されるが、それを上回るものとして顕在化してくるのである。

4. アドルノとホルクハイマー

最後に本章では、アドルノの論文を読んだ M・ホルクハイマーの批評と比較し、その観点と方法を際立たせたい。

(1) 往復書簡での見解と差異

ホルクハイマーは、受け取ったアドルノの論文にたいする批評の含まれた書簡を送った¹⁸。その中で彼は次のように述べている。

あなたが確信したのは、まずフッサールの理論の脆弱さが、その理論に固有の手段によって証明されなければならないということ、そうしてはじめて、正当な仕方でも超越的批判をおこなってもよいということでした。もちろんあなた自身もまたいくつかの決定的な箇所でも超越的批判を実行しました。たとえば [……] 絶対的意識の内容が [内在的な] 反省を排除して物の世界の上に形成されるとあなたは説明します。(AHB-I. 426)

¹⁸ 1937年10月13日付。AHB-I. 422-433.

ホルクハイマーはこのように評価するが、結局は「あなたの論文の中で、いずれにしても論争を内在的に調停できない」(ebd.)と指摘する。彼からすれば、現象学に固有の方法ではなく、たとえば「物の世界」に基礎をおく方法が望ましいのである。その一方で書簡では「他なる自我に関する最終節もまた[……]その他の点からしてもまったく正当な超越的な確定に帰結する」(AHB-I. 427)と述べている。彼にとっては他なる自我もまた、超越的存在に基礎づけられると理解される。このことから、ホルクハイマーが内在哲学ではなく、超越的に物的な存在を土台にした、一種の実在主義的な観点と方法を持つことがわかる。

この批評にたいしてアドルノは、ただちに返信を送った¹⁹。彼は自分自身の基本的な立場について、「[……] 私たちの関心事は、[内在的批判でもなく超越的批判でもなく] まさに第三のもの、つまり私たち自身の「超越的な」洞察の力で、相手の「内在的な」思想過程を用いて、それを突破する」(AHB-I. 447) ことだと述べている。ホルクハイマーが内在と超越のいずれかを選択する立場であるのにたいして、アドルノはそれを採用しない。それゆえ他者経験論に言及した箇所では、ホルクハイマーの立場であっても「一方で[……] 必然的にそれ自体で観念論的帰結を含意すること、つまり最終的には意識へと引き戻されること、他方でこの観念論的帰結を実際に目指す哲学が、問題設定自体が的確な意味で虚偽として立てられるという矛盾へと必然的に展開することへと至る」(AHB-I. 448)と述べている。つまり物に基礎をおく反観念論の立場でさえも観念論的になり、逆に観念論もそれ自体で虚偽性を露呈させるのである。それゆえ彼は、たとえどちらか一方の立場を選んだとしても、反対のものに転じうるとみなす。アドルノからすれば、ホルクハイマーがいずれの立場にあるにしても、それ自体に矛盾を含んでおり、それぞれの立場の中で内在的に問題に取り組まざるをえないのである。

(2) 論文の修正

ふたりのやり取り²⁰からは、それぞれの観点と方法の違いから、たがいの理解にずれのあることがわかる。アドルノ自身もまた、論文を実際に修正するのに際して、誤解が生じないように配慮している。たとえば論文の最後の部分は、次のように変更された。

観念論の仮象と必然性との絡まり合いが、その歴史の中で、フッサールの場合ほど、見通しの利くものとなったことはめったにない。フッサールは、帰納の必然的な仮象性にも演繹の仮象的な必然性にも敵対して、逆説的な立場に観念論を呪縛しようとした。この逆説の根拠、つまり人間のモナド論的体制が廃棄されることがあり

¹⁹ 1937年10月23日付。AHB-I. 443-455.

²⁰ このやり取りがその後の『啓蒙の弁証法』の共同作業へとつうじる弁証法的討議の端緒になったとの指摘もある (vgl., Tilo Wesche, 2003, „»Ach philosophierte ich mit Max über Dialektik an der Riviera...« Adornos früher Briefwechsel mit Horkheimer.“ In: *Musik und Ästhetik*. (28) Stuttgart, Klett-Cotta Verlag, S. 106-110)。この中では、本稿でも取り上げた現象学をめぐるやり取りにも言及されている。

うるとすれば、それは、いつの日かついに意識が存在を——それを基礎づけるのは自分だと、意識がいつも嘘を並べるだけであった存在を——支配するときのことであろう。(GS5. 235)

修正によってあらたに「観念論の終わり」と見出しが付され、他者経験論に関する論述も削除された。この修正において彼は現象学を観念論の一形態とみなし、その自己批判をおこなう立場として位置づける。また彼は、意識と存在との関係についても単純な択一的議論をおこなわない。それは次の叙述からもうかがえる。

存在の還元不可能性を存在の存在論的優位として非合理的に打ち立てることと、基礎的な意識分析を、それが意識に固有でないものの領域に反転する地点まで駆り立てることは、まったく別のことである。なぜならば、この意識分析の反対側にあるものは、たんなる意識分析の反対にあるもの、すなわち意識されないものでも、あらゆる言表から引き離された存在でもないからである。存在にたいする意識の優位という要求は阻まれる。けれどもやはり、現存在に優位性が譲渡されることにはならない。(GS5. 234-235)

このようにアドルノは、単純に意識の優位を否定する代わりに存在の優位を説くのではない。むしろこの両者を相互関係の中で考える。そしてその上で、他者の存在を問おうとするのである。

5. おわりに

本稿では、アドルノの主張を手引きとしながら、フッサールの他者経験論における問題を検討した。「脱出の試み」としての他者経験論は、独我論という非難を退けつつ、内在的立場を保持した。そこで生じたのが、他者経験を成立させる基盤の問題、および他者の超越性の問題であった。アドルノは前者の問題にたいしては、基盤としての社会を見出すことによって、現象学の限界と可能性を提示した。また後者の問題にたいして彼は、内在的な立場を徹底する中で、他者の超越性が顕在化することを示した。他者の存在は、素朴に実在するもの、意識から独立した存在として想定されるのではなく、意識の経験において内在的にとらえられるべきものであるのと同時に、社会において存立する超越として位置づけられるのである。この位置づけは、本稿の冒頭で述べた〈非同一的なもの〉と同様の性格を帯びる。彼にとって他者は、〈非同一的なもの〉の表現のひとつなのである。

アドルノの他者概念の理解は、彼の〈非同一的なもの〉の思想の一端を示すと同時に、現象学に含まれる問題をあらわにした。そして彼は、社会という問題をつうじて、フッサールが晩年に主題化した生活世界と同様の議論をおこなっていた。これは後年 J・ハーバーマス

らが展開した生活世界の問題に先行している。さらに現象学と社会との関係をめぐって、アドルノは現象学自身の方法を徹底化することで解明している。こうした彼の立場は、現象学や他者経験論にあらたな視点を提供するであろう。

凡例

本文中の〈 〉は意味のまとまりを表示したもの、()は補足表示である。

引用文中の〔 〕は、訳出に際して補足したものである。

引用文は拙訳であるが、邦訳があれば適宜参照している。

人名については、敬称を省略している。

文献および文中略号

- Adorno, Theodor W., 1986, „Zur Husserls Philosophie,“ (1937) in *Gesammelte Schriften*. Band 20, hrsg. von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. S.46-118 (GS20 と略記、全集版の頁数を表記)
- , 1971, *Zur Metakritik der Erkenntnistheorie. Studien über Husserl und die phänomenologischen Antinomien*, (1956) in *Gesammelte Schriften*. Band 5, hrsg. von Rolf Tiedemann, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. S.7-245 (GS5 と略記、全集版の頁数を表記)
- , 1971, *Drei Studien zu Hegel*, (1963) in GS5. S.247-381
- Adorno, Theodor W. und Max Horkheimer, 2003, *Briefwechsel 1927-1969*. Band 1, hrsg. von Christoph Gödde und Henri Loniz, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. (AHB-I と略記、頁数を表記)
- Horkheimer, Max und Theodor W. Adorno et al, 1985, [Wissenschaft und Krise. Differenz zwischen Idealismus und Materialismus. Diskussionen über Themen zu einer Vorlesung Max Horkheimer], (1931/1932) in *Gesammelte Schriften*. Band 12, hrsg. von Alfred Schmidt und Gunzelin Schmid Noerr, Frankfurt am Main, Fischer Verlag. S.349-397 (HGS12 と略記、全集版の頁数を表記)
- Husserl, Edmund, 1950, *Cartesianische Meditationen. Eine Einleitung in die Phänomenologie*, (1931) in *Gesammelte Werke*. Band 1, hrsg und eingeleitet von Stephan Strasser, Haag, Martinus Nijhoff Publishers. (Hua I と略記、全集版の頁数を表記)
- , 1954, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. In *Gesammelte Werke*. Band 6, hrsg von Walter Biemel, Haag, Martinus Nijhoff Publishers. (Hua VI と略記、全集版の頁数を表記)
- , 1974, *Formale und transzendente Logik : Versuch einer Kritik der logischen Vernunft*, (1929) in *Gesammelte Werke*. Band 17, hrsg von Paul Janssen, Haag, Martinus Nijhoff Publishers. (Hua XVII と略記、全集版の頁数を表記)

(あおやぎまさふみ・立命館大学)